

北九州市立文学館

# 友の会会報

第12号

令和3年1月

## 中村哲さんに重なる 火野葦平のまなざし

葦平没後60年展 渡辺考さんが講話

北九州を代表する作家、火野葦平の没後60年記念企画展が2月14日まで北九州市立文学館で開かれています。戦争中、「妻と兵隊」に始まる兵隊3部作で国民的作家の地位に登り詰めながら、戦後は戦争協力者のレッテルを張られた葦平。昨年11月21日の開会時には、葦平が残した従軍手帳を素材にしたドキュメンタリー番組を制作し、『戦場で書く 火野葦平のかたつの戦場』の著書もあるNHKエデュケーショナル特集文化プロデューサーの渡辺考さんが葦平作品を今、読むことの意義を話しました。その内容を紹介します。

(伊藤和人)



火野葦平

渡辺考さんプロフィール  
1966年東京都生まれ。早稲田大学政経学部を卒業後、1990年NHKに入局。E・T・V特集やNHKスペシャルなどを手掛け、戦争関連の番組を多く制作。著書に『最後の言葉』（重松清さんととの共著）『アパロパガンダ・ラジオ』など。2013年に「NHKスペシャル 従軍作家たち 戦争上」E・T・V特集「戦場で書く〜火野葦平の戦争上」を制作し、「E・T・V特集 戦場で書く」でその橋田寿賀子賞を受賞。「戦場の取材をもとに著書と従軍作家たち」を刊行。「戦場は朝日新聞出版より文庫化。また、葦平が1944年、インパール作戦に参戦した時の手帳を翻刻し、『インパール「従軍手帖」一文翻刻』に寄せている。



「弱い立場の人々の側に身を置いた番組作りを心掛けています」と話す渡辺さん

小倉駅に降りたとき、2019年12月にアフガニスタンで銃弾に倒れたベシヤワール会現地代表の中村哲さんを思い出して胸が熱くなりました。中村さんは葦平の甥にあたります。2013年、葦平の番組を作る折の取材で初めてお会いしました。中村さんは中学時代、葦平の著作を読み込み、庶民のまなざしこそが葦平作品の根底を貫いていると感じたそうです。

「兵隊3部作も、描かれているのは敵味方を問わず、子どもを愛する一般の人々の心の内。アジアの庶民に寄り添おうとした伯父の視線は、少なからず私の生き方に影響を与えています」と、中村さんは話してくれました。

私は20年ほど前、1回目の福岡勤務になり、主にドキュメンタリーを手がけました。陸軍特攻隊の生存者が収容された振武寮、RKB毎日放送の名物ディレクター木村栄文さん、筑豊の画家山本作兵衛さんなどです。福岡に根付く歴史と人物に魅了されました。葦平が戦場でつづつた20冊の従軍手帳が北九州市立文学館に残されていることを知ったのは、東京勤務時代の2013年初めのことです。兵隊3部作の元になる文章が、庶民への温かいまなざしを伴った言葉と共に書き連ねてありました。

それを基に葦平が従軍した中国、フィリピンを訪ねて作ったのが同年8月放送のNHKスペシャル「従軍作家たちの戦争」と12月のE・T・V特集「戦場で書く〜作家 火野葦平の戦争上」です。取材は平坦ではありませんでした。中国では誓約書へのサインを求められました。「火野葦平は戦争協力者ではないか。今のあ

なたたちの国は猛々しい感じである。葦平を戦争のヒーローとして取り上げるなら取材は許可できない」。今も葦平が厳しい目で見られているという現実を突きつけられました。

フィリピンでも戦争を知る人たちは決して当時の日本の行為を好意的に見てはいませんでした。バタワン半島の日本軍本部跡には、フィリピン人が日本軍と戦ったことを記念するモニュメントが建っています。葦平はフィリピンでは文化工作に積極的に従事しました。日中戦争には懐疑的でしたが、太平洋戦争についてはアジアを欧米の呪縛から解放する戦争だと本気で思っていたようです。つまり大東亜の理念を信じていたようにも見受けられます。

それでも従軍手帳は、現地の人々の営みを対等な視点で記録しています。若松の石炭仲仕業を営む「玉井組」の長男として生まれ育ち、朝鮮半島出身の人たちを台む労働者と苦楽を共にした原点が大きかったのではないのでしょうか。

葦平の母のマンさんは、幼い頃の孫である中村哲さんにこんな教を繰り返して伝えてきました。「弱者は優先してかばう」「職業に貴賤はない」「どんな小さな生き物の命も尊ぶべき」。葦平も同じ教えを母から受けたのでしょう。中村さんの一周忌を迎える今、葦平は中村さんのような気骨の人だったのだからと思っっています。葦平を読み直すと、強者になびきがちな今の時代への警鐘が、どんどん見つかるのではないかと。葦平と出会えてよかつたと心から思っています。

展覧会  
紹介

火野葦平展の見どころ

文学館では11月21日から「没後60年 火野葦平展」レッセルはかなしからずや」を開催しています。その見どころを一部ご紹介します。

本展では約100点の自筆資料を一挙に公開しています。初公開資料の「鴨の日記」は、森にすむ鴨が書いた日記という体裁の童話で、ファンタジー色あふれる作品です。出版社に持ちこまれたものの、残念ながら没書となり、刊行はされませんでした。葦平が自費出版で初めて出した本『首を売る店』につながる習作期の貴重な資料です。

また戦地で書かれ、〈兵隊3部作〉ほかの従軍記の資料となった「従軍手帳」は、全17冊をまとめて展示しています。細かい字でびっしりと書かれた小さな手帳は、文字からの情報を超えた戦地の雰囲気を感じさせます。

そして今回、新たに発見された原稿「九月二十五日記」です。葦平は遺書「ヘルスメモ」に自死の理由として「或る漠然とした不安のために」と書いています。その4か月前に書かれたと考えられるこの資料には、健康への不安、強烈な孤独感、愚劣への恐怖など、生きることへの絶望が綴られ「或る漠然とした不安」の内実に触れています。葦平の死の理由の一端を示す貴重な資料と言えるでしょう。

作家の全体像を追った本展を通じて、一人の表現者としての葦平の想いに寄り添っていただければ幸いです。

(北九州市立文学館学芸員 稲田大貴)



原稿「九月二十五日記」

映画と  
文学

北九州市出身作家の映画化作品

北九州市立文学館「没後60年 火野葦平展」にあわせて昨年の秋、小倉昭和館では火野葦平原作『女侠一代』と松本清張原作『点と線』を上映しました。郷土出身の二大作家の映画化作品を同時上映することにより、この街の文学の層の厚さを改めて感じて頂けたのではないのでしょうか。

火野葦平原作映画は、『土と兵隊』（1939年公開）に始まり『ダイナマイトとんどん』（1978年公開）まで、23作品あり、その多くが北九州を舞台としています。特に、葦平自身の面観をモデルにした『花と龍』（若松が舞台）は8回も映画化されており、主人公の玉井金五郎役には藤田進、石原裕次郎、中村錦之助、高倉健、渡哲也と、日本を代表するスターが演じています。いかに国民に愛されているか、おわかりいただけると思います。

忘れられない作品として、当館でも戦後特集の折に上映した木下惠介監督の『陸軍』（1944年公開）があります。戦後、火野葦平は『妻と兵隊』『土と兵隊』『花と兵隊』の兵隊3部作などにより、「戦争協力者」のレッテルが貼られました。戦前（昭和19年）に作られたこの作品に、葦平の真意を見てとることが出来るのではないのでしょうか。田中絹代が演じる母親が戦地へ向かう息子を涙ながらに追いかけるラストは圧巻です。

松本清張原作の映画は36作品と多く、映画のみならず、現在もテレビドラマ化され続けており、その人気の高さが窺われます。当館でも皆様のリクエストに応え、節目節目に上映しています。

小倉昭和館では映像化された作品を通し、この街ゆかりの作家の作品に触れて頂けるように、「東アジア文化都市北九州2020▶21」の一環として「アートシネマ」を企画し、来年実施の予定です。ご期待ください。

(小倉昭和館館主 樋口智巳)

おすす  
めの本

『葬送 第一部・第二部』

平野啓一郎著 新潮社  
2002年8月30日発行

著者は2歳から北九州で暮らし、福岡県立東筑高校を卒業。1999年、京都大学在学中に『日蝕』で芥川賞を受賞し、その後多数の著作と受賞歴がある。

『葬送』は1849年10月30日マドレーヌ寺院でのシヨパンの葬儀の情景から始まっており、19世紀パリが舞台。画家ウージェーヌ・ドラクロアと音楽家フレデリック・シヨパン、小説家ジョルジュ・サンドを中心に据え、芸術家たちの苦悩と創造の歓喜に迫っている。人間模様の描写も鮮やかだ。私は、登場人物たちに激しく感情移入して読んでいることに気がついた。たとえば、ドラクロアが下院図書室の天井画を完成した時の陶酔と孤独、死に往くシヨパンが美しい音楽を全身に染み渡らせながらもサンドを待ちわびる焦燥と悲しみ。彼らとともに呼吸をしている私の心は昂揚する。作者は貪欲にも人間の感情のあらゆる諸相を描き尽くそうとしているかのようだ。華麗に繊細に彫琢されたこの作品は、作者の壮大な構想力と構築力、精緻な資料収集と考証、博学な知識に支えられている。

『葬送』を読み終えた私は、ドラクロアの絵画に一層魅了され、シヨパンの旋律が一入心に響いてくるようになっていた。そして、王政から共和制に移行する激動のパリに生きた登場人物たちの濃密な日々を思い、現代の私たちの生を深く考えさせられた。

読者の想像力を喚起し、作品世界に引き込み、瑞々しい光を与え得る文学の力を実感した。

北九州ゆかりの作家の活躍は、読者にとってほんとうにうれしい。

(三村保子)



ドラクロアの自画像



シヨパンの遺像(ドラクロア作)

平野啓一郎著  
『葬送 第一部・第二部』  
新潮社

リレー  
エッセイ

## 1936年の「宗左近」？

九州共立大学 大川内 夏樹

2019年6月から3、4か月に一度くらいのペースで、北九州出身の詩人・宗左近について学ぶ「宗左近・現代詩研究会」という勉強会を行っています（ご関心のある方はぜひご参加ください）。この勉強会の際におもしろい情報を提供したいということもあり、時々インターネットサイト「日本の古本屋」で、宗左近に関する資料を探そうとしているのですが、ある日、気になる本を見つけました。それは、八高俳句会という団体が1936年に刊行した『句集 草毒 第四輯』というものです。この本を売っていた古書店が付した説明によると、収録された句の作者の中に「宗左近」という名前の人物が含まれているということでした。

しかし、ここにひっかかる点が二つありました。一つは、宗左近というペンネームは、戦後になって使い始めたと言われていること、そしてもう一つは、宗左近が通っていたのは第一高等学校であり、第八高等学校とのつながりが分からないことです。もしかすると宗左近は、八高に入学したことがあり、その時に「宗左近」というペンネームを使い始めたものの、その後、一高に入りなおしたために、八高の記憶とともに「宗左近」の名前を一度捨てたのでしょうか。ただ、宗左近が小倉中学を卒業したのは、1937年3月ということになっているので、この点に誤りがなければ、1936年の時点で八高に在学していることは不可能です。しかし、八高に進学していた知り合いの伝手などで『草毒』に句を載せてもらった可能性はあるかもしれません。このように妄類はどんどん膨らみましたが、これらの謎を解くために、まずは『草毒』を注文することにしました。

数日後に届いた『草毒』には、確かに「宗左近」の句が5句収められていました。さらに『編輯後記』には、「宗左近」に関する次のような記述がありました。

太田晤呷君酒井春君宗左近君は、何れも太田了次君酒井杜樺君柘植逝春君の改号です。左近君は特異の境地を進まれる作家で、特に自選句であります。

「左近君は、特異の境地を進まれる作家」という一節

には、「宗左近」は宗左近かもしれないと期待させるものがありました。が、「宗左近」は「柘植逝春君の改号」とあるため、やはり違いかもしいという気になりました。やや気落ちしつつも、「柘植逝春」という「宗左近」以前のペンネームと思われるものを手がかりに1936年前後の『第八高等学校一覽』を調べてみたところ、1933年刊行のものに掲載の生徒一覽の中に「柘植」という名字の人物が見つかり（フルネームは一応伏せておきます）、また古賀照一（宗左近の本名）の名前はどこにも見あたりませんでした。そこで改めて『草毒』の『編輯後記』をよく読むと、句集刊行の時点で「宗左近」は、すでに卒業生であったことが述べられており、『草毒』の「宗左近」は「柘植」氏だろうというひとまぎの結論に達しました。

今回の調査は、残念な(?)結果に終わりましたが、宗左近については、まだまだ分からないことだらけであることを実感しました。今後も「宗左近・現代詩研究会」のご参加者の皆さまとともに、宗左近という大きな謎を少しずつ解いていきたいと思っております。

「宗左近・現代詩研究会 お問い合わせメールアドレス：  
soh.sakon.bananokai@gmail.com

会員投稿

## コロナ禍での「読書の力」

ブックネットワーク北九州 仲 紀子

2020年、私達は新型コロナウイルスというパンデミックを経験したことにより、これまでとは違う生活を強いられることになりました。毎日巣こもり生活を続ける中、私はゆつくりと読書をする時間を持つことで、在宅のままでも自分を豊かにする時間を過ごすことができ、改めて「読書の力」を実感しました。では、読書習慣が身につけていない子どもや大人はコロナ禍を在宅でどう過ごしたのでしょうか。

私は、北九州市内外で0歳から大人までを対象に、読書の大切さや楽しさを伝える子どもを中心とした読書推進の活動をしています。コロナ前までは、行政や企業から依頼を受けて年間200以上の活動を展開してきました。

今、共働きや保護者の読書レスの増加、携帯電話やゲー

ム等が氾濫することによって「聞く・話す・読む・書く」など家庭での言葉の教育力が低下しています。特に乳幼児期に読書習慣の入り口が出来て無い上に、就学後の読書の始まり方の学習的側面が強いことから読書の楽しさを味わうことがなく習慣に成り得ていません。

読書習慣を育て発展させていくためには、家庭・学校・地域の連携とそれぞれのニーズに応じることの出来る社会全体の取り組みや仕組み作りが必要です。更には、専門家やボランティアの補助が不可欠と考えています。

そこで、新しい読書を通じた世代間をつなぐ人々とのコミュニケーションの場の提供も大切と考えて子どもの読書推進の任意団体を立ち上げました。

活動するに当たっては長期的に継続して行うことが重要と考え、「助成金を受けずに運営していけること」を目指しました。その為に実践してきたことは、活動を進化させるために、最初の一歩の「読み聞かせ」だけではなく、児童サービス全般を提供できるような取り組みと共に、無償ボランティアだけでなく有償ボランティアにも力をいれることにしました。その結果「読書で学び！ 読書で遊び！ 読書で感動！」をキャッチフレーズに、目標通りに行政からの助成金無しで25年目の活動を迎えることが出来そうです。

今年の活動はコロナ禍の影響をかなり受けましたが、逆に活動を全部見直す良い機会となり、受け身に成りがちであった自分たちの活動を積極的な活動に改革しているところです。2011年に開設した「小さなとしよかん」では、三密を避けるため少人数の取り組みになりますが、新しく企画したイベントを毎日実施した結果、コロナ前よりも来館者数が増える結果となりました。

世間では「鬼滅の刃」が大ブームです。コミックやアニメに夢中になれる若い世代に、もつとどうやって物語（文学）の世界に目をむけてもらうかが興味深い課題と考えています。

優れた読書家の皆様から子ども達へ「読書の世界」の豊かさや大切さをどうやって伝えるかというテーマを追い続ける大人が増えることを願っています。

人生100年時代！ 読書で人生を豊かに！

